宮沢賢治
心象スケッチ「九九〔鉄道線路と国道が〕」考

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2003-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 杉浦, 静
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1377

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

宮沢賢治　心象スケッチ「九九〔鉄道線路と国道が〕」考

杉浦　静

宮沢賢治の心象スケッチ「九九〔鉄道線路と国道が〕」（一九二四、五、一六、）は、生前未発表であるが、このスケッチの最終形態が書かれている紙葉には、欄外に「童話の扉に」というメモが記されていた。このメモは、本スケッチを童話集の扉に掲載しようと考えた時期があったことを示している。しかし賢治生前には『注文の多い料理店』以外の童話集は刊行されなかったので、この目論見は実現されなかった。現存する心象スケッチ（詩）草稿に記入したメモ等のなかで、スケッチと童話（集）とを結びつけたものはきわめて少ない。そのなかで、このスケッチに童話（集）との関連がメモされたのはこのスケッチの内容・性格に、童話（集）に通じるものがあると賢治自身が読んだためであろう。

1

「九九〔鉄道線路と国道が〕」（一九二四、五、一六、）には、下書稿㈠・㈡の二種の逐次形が残されている。[注1] メモが記入されているのは、下書稿㈡の紙葉であるが、このスケッチは、最初に次のような形（下書稿㈠第一形態）で書き始められた。

九九

陸中の五月

一九二四、五、一六、

これは所謂芬芳五月の
昔ながらの唯心日本の風景です
ならんだ木立と家とはみちに影を置き
それははるかな山の（一字不明）鏤やみ雪とともに
たびびとのこゝろのなかのそのけしきで
いたゞきに花をならべて植えつけた
ちいさな萱ぶきのうまやでは
黒い馬がもりもりかいばを噛み
頬のあかいはだしのこどもは
その入口に稲草の縄を三本つけて
引っぱったりうたったりして遊んでゐます
年経た並木の松は青ぞらに立ち
田を犁く馬は随処せはしく往返し
山脈が草火のけむりとともに
青くたよりなくながれるならば

雲はちゞれてぎらぎらひかり
風や水やまたかゞやかに熟した春が
共業所感そのものとして推移しますと
さっきの青ぞらの松の梢の間には
一本の高い火の見はしごがあって
その片っ方の端が折れたので
すきとほって青いこの国土のgoblin[注2]が
そこのところでやすんでゐます
やすんでこゝらをながめてゐます
ずうっと遠くの崩れる光のあたりでは
前寒武利亜紀のころの
形のない鳥の子孫らが
しづかにごろごろ啼いてゐます
もうほんたうに錯雑で
容易に把握をゆるさない
五月の日本陸中国の（約四字不明）の風景です

このスケッチは、「陸中の五月」と題されている。「陸中」を用いていることにまず注目しておこう。スケッチ本文でも、「日本陸中国」という呼称が使用されている。宮沢賢治はこのスケッチを書き出すにあたって、「陸中国」という岩手県地

方の旧国名を選んで使っているのである。ここから、このスケッチがどのような性格のものとして書き始められたかをうかがうことができよう。その場所を、旧国名などを用いて指示することは、その場所の背負っている歴史性をも名指すことになる。このスケッチでいえば、「一九二四、五、一六、」という日付の岩手県の〈現在〉をそのままにスケッチするのではなく、そこに重層する前近代からの持続を一定の意識に従って描きとるということである。それは、賢治的に言うならば、古い浮世絵的世界を眼前に見出そうということ、または眼前の風景を浮世絵に見立ててみようとすることにつながるものである。

宮沢賢治は、このスケッチの日付の数日後から、花巻農学校の生徒を北海道修学旅行に引率したが、その報告書として綴った「修学旅行復命書」に次のような一節がある。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独乙唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行はるゝなり。若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか孰れかかの懐かしき広重北斎古版画の一片に非らんや。実に修練斯の如くならざるよりは田園の風と光とはその余りに鈍重なる労働の辛苦によりて影を失ひ、農業は傍観して神聖に自ら行ひて苦痛なる一の skimmed milk たるに過ぎず、且つや北海道の風景、その配合の純　調和の単　容易に之を知り得べきに対し、郷土古き陸奥（みちのく）の景象の如何に複雑に理解に難きや、暗くして深き赤松の並木と林、樹神を祀れる多くの古杉、楊柳と赤楊との群落、大なる藁屋根　檜の垣根、その配合余りに暗くして錯綜せり。而して之を救ふもの僅に各戸白樺の数幹、正形の独乙唐檜、閃くやまならし赤き鬼芥子の一群等にて足れり。寔に田園を平和にするもの樹に超ゆるなし。

ここで述べられているのは次の二つのことである。旅行中は「心緒新鮮にして実際と離」れているから生徒たちは、「審美容易に行はるゝ」。郷里においてもこの新鮮な心緒を持てるように「修練」すれば、郷里岩手県にも「かの懐かしき広重北斎古版画の一片」を発見できるということである。そのような発見が可能であれば、田園は「風と光」を回復し、労働

の辛苦・苦痛も軽減されるというように展開されている。もう一つは、「郷土古き陸奥（みちのく）」[注3]の風景を形成する植生や民家の形状等の配合が、複雑で、暗く錯綜している。そこに、鮮やかな植栽や形状のおもしろい樹々を置くことで、配合・調和の美を獲得でき、「田園に平和」をもたらす、というものである。前者は、浮世絵的風景の発見による労働意欲の回復、後者は、装景による田園風景の美的改善という現実的農村改革の提言になっている。これは、農学校生徒に向けられた具体的な提言であるが、ここに語られている〈まなざし方〉を、スケッチ（詩）において実践すれば、見立ての方法となる。先に私は「曠原淑女」[注4]を採り上げて、農村の少女をウクライナの舞手に見立てる方法に、「〈イーハトーヴ〉への志向」を指摘したが[注5]、「〔鉄道線路と国道が〕」は、「曠原淑女」のウクライナとは異なって陸中国を浮世絵に見立てようとしているものであるが、「修学旅行復命書」に述べる〈まなざし〉の方法を実践しつつ書き出されたものであることにおいて変わりはないと言えるだろう。

2

このスケッチの題名は、下書稿(一)の第一形態では、「陸中の五月」であったが、手入れの段階で「行脚僧の五月」に変更されている。冒頭部も、いったん

行脚の僧の目にうつる
古い陸中国の
（約三字不明）風景です

という詩句が案じられたが、すぐに消されている。この手入れと、題名変更の先後関係は決めがたいが、何れにせよ、「行脚僧」という視点人物を設定し、その目にうつる陸中国の風景のスケッチへとテクストは動いて行ったのである。その

際に、題名の変更に応じて冒頭部も

これは所謂清明五月

陸中国は昔ながらの風光である

と推敲され、第一形態で「唯心日本の風景」とあった箇所は削除され、直後の、

「たびびとのこゝろのなかのそのけしきで」の部分も、「たびびと」を「ひとびと」と一般化する方向での手入れも試みられたが結局採用されず、

所感暈の外のものならず

となっている。草稿では、「暈」は「景」の書きかけにも見え、疑問が残るところであるが、下書稿(二)の第一形態では、「所感の外のものならず」を採用しているので、最終的にはこの形になったのである。ここに描かれた風景は行脚僧の所感そのものであるというように、手入れされたわけである。これに連動して、数行後の

風や水やまたかゞやかに熟した春が

共業所感そのものとして推移しますと

もまた、

雲はしづかにひかってちゞれ

満ちては雲も〔蒼〕惶として

明日の青い嵐とに謝する

と推敲され、「共業所感」(注6)という表現は変更されていった。

末尾は、最終行を

五月の日本陸中国の〔唯心的な→農民たちの〕風景です

とした後に、「もうほんたうに」以下三行をまとめて、削除している。その後、いくつかの詩句を記そうとしているが、これもまた削除されている。この削除は、この段階でのテクストの終結のアイデアが熟さなかったための、中絶とみるべきで、末尾を描写のままで止めた訳ではない。なぜなら下書稿㈡の第一形態では、再びこの末尾句が生かされて、

これは所謂清明五月
あしたは移る陸中国の風景である

となるからである。

このように、ほぼ同内容の詩句が、枠組みあるいは額縁として設定され、それに挟まれた部分が、「陸中国の風景」のスケッチとして読者に提示されているのである。

このような手入れによって、スケッチは題も変更されて「行脚僧の五月」へと変化することになったわけである。視点人物である僧の行脚する土地は、陸中国。季節は、清明五月である。陸中国は岩手県の近代以前の呼称（旧国名）、清明とは二四節気の一つの清明節であろう。清明節は春分から一五日目に当たる日で、一九二四年の場合は、四月五日であった。賢治はこのスケッチ以外でも、「三三一七　清明どきの停車場」[注7]とこの語を使用したスケッチを書いている。「三三一七」に付された日付は「一九二五、四、二一」。一九二五年の清明節も四月五日である。しかし、二四節気はもともと太陰暦上の時期であるから、太陰暦で考えてみると、一九二五年の場合、新暦（太陽暦）の四月二七日が、旧暦（太陰暦）四月五日になり「三三一七」とは一週間くらいの違いとなり季節感は重なるともいえる。「行脚僧の五月」の場合も、一九二四年の旧暦四月五日（清明）は、新暦では五月八日であり、「一九二四、五、一六」の日付とはほぼ一週間の違いとなる。とすれば、「草木いよいよ新鮮」（『歳時記大観』[注8]）といわれる清明を、春の遅い陸中国にあわせて、旧暦の四月五日にあたる新暦の四月末から五月はじめ頃の季節としてとらえたのであろう。

さて、このようにして陸中国の五月を行脚する僧によって感受されたのは、下書稿㈠の最終形（下書稿㈡の第一形態に

ほぼ重なる）では、次のような風景である。

いたゞきに花をならべて植えつけた
ちいさな萱ぶきのうまやでは
黒馬もりもりかいばを噛み
頬のあかいはだしのこどもは
その入口に稲草の縄を三本つけて
引っぱったりうたったりして遊んでゐる
五柳は萌えて青ぞらに立ち
田を犁く馬は随処せわしく往返し
山脈が草火のけむりとともに
青く南へながれるならば
雲はしづかにひかってちゞれ
満ちては春も〔蒼〕惶として
明日の青い嵐に謝する

ここには、「萱ぶきのうまや」があり、「はだしのこども」が遊び、並木の松は青々と萌え、田では田植えに備えて馬は田掻きの最中である。五月は、「神々が山を下り、御堂を出で、又は古屋の奥座敷から出て手伝はねばならぬ程、村の五月は忙しい。」と記されるように、民俗伝承では、オシラ神まで「五月の田植時に、田掻きの鼻取りをして手伝」うほど忙しい時期である（佐々木喜善「農業手伝神」[注9]）。その田園風景が描きとられている。

この風景の中に、goblin が登場する。

さっきのかゞやかな松の梢の間には
一本の高い火の見はしごがあって
その片っ方の端が折れたので
赭髪の小さなgoblinが
そこのところでやすんでゐる
やすんでこゝらをながめてゐる

goblin＝ゴブリンは、『妖精事典』（キャサリーン・ブリッグス著）[注10]には「敵意、悪意をもつ精の一般的名称。通常、体は小さく、容貌は怪奇。」と説明されるケルト由来の妖精である。牛崎敏哉は、ウェールズのケルトに着目し、スノードン山や避暑地ランディドゥノ（『不思議の国のアリス』のモデル、アリス・ノデルやルイス・キャロルの訪れた土地）と賢治の関わりについて示唆している（「イーハトーヴ・異界への旅（15）」[注11]）が、ゴブリンの登場するこのスケッチの次の日付・番号のスケッチ「一〇六〔日はトパースのかけらをそゝぎ〕」（一九二四、五、一八）の最初の題名が「アリス・石塚・」であったことを考えると、一九二四（大正一三）年五月の半ば頃に、ケルト或いはウェールズへの関心が触発される何かに触れた可能性を想定できそうである。

ここでは、行脚僧の遠景に松の梢が見え、その間にさらに遠くの火の見のはしごが遠望されている。そして、その片方の端が折れたはしごにゴブリンがたたずんで、この辺を眺めている。この詩句に続けて、手入れの段階で「あるひはそれは千年前の影ででもあって」を挿入し、それを「あるひはそれは千年前の影法師ででもあるのでしょうか」と変更した後、結局削除している。この手入れは、ゴブリンを、過去の存在の影（法師）にすることによる非実体化或いは虚像化を試みたものであるが、しかし結局削除されることによって、スケッチの中では実体化したものとして捉えられている事になる。また、ゴブリンに対しては、何度か「この国の」と限定する句を被せようとしているが、結局、「赭髪の小さな」という形

で定着される。スケッチの全体が「陸中の五月」を題材にしているところから、国の限定は不要と考えたのだろうと思われるが、「風野又三郎」に共通する「赭髪」を明示して異類の徴表を明らかにしたのでもあろうか。

このゴブリンは、ザシキワラシにも重なるような伝承中の存在と考えてよいものだろう。佐々木喜善は、「雨窓閑話」(注12)で、ザシキワラシの話と世界の類話中のサンショウ・キムジン・ドモオヰ・セルバン等を紹介した後に、

先年ゼネヴに居らした柳田国男先生からのおたよりの中に、雪のきらきらと光る日に、彼のセルバンの居る山間の村々から赤い頭巾を被った若い女達が話しながら町へ来る…と云ふことがありました。私達の村々もこんな物の居るうちは奥床しくてよいと思ひます。尚又私達が村々の古い家の薄暗い彼のオシラ様の居なさる黒い奥座敷の中に残ってゐる。こんな古い記憶と心持ちをも、先祖の系図書でもしまつて置くやうに皆さんの心の奥にしまつて置いてもよいと思います。

と記している。佐々木は、伝承の中の存在が近代化とともに亡びて行きつつある現状を自覚しながらも、しかし、このような存在が人々の心の中では実体化されていること、それが人々の生活において意味のあることを語っている。

ここで、ゴブリンが何をする途中で「やすんでここらをながめて」いるのかはわからないが、この「陸中の五月」の風土の人々は、このゴブリンのような存在とともにある。それを行脚僧は、五月の日本陸中国の風景として見ているのである。

終末部は、第一形態では、

ずうっと遠くの崩れる光のあたりでは
前寒武利亜紀のころの
形のない鳥の子孫らが
しづかにごろごろ啼いてゐます

とはるか彼方の鳥の鳴き声を点描した後、「もうほんたうに錯雑で／容易に把握をゆるさない／五月の日本陸中国の（約四文字不明）の風景です」と結んでいる。

この箇所は、先に述べたように、冒頭部の手入れに呼応して、最終形態では、削除されて行くことになるわけだが、この結びは、この陸中国の風景が、行脚僧にとっても、書き手にとっても解読しがたい「錯雑」したものであることを自己言及的に語っている箇所と読める。中地文は、「宮沢賢治もう一つの童話集序文」[注13]で、この箇所が『注文の多い料理店』序文の「なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです」という部分との「内容的に一致」を指摘していた。確かに一致はするが、しかしこのスケッチにおいては、ここに「修学旅行復命書」に「郷土古き陸奥の景象の如何に複雑に理解に難きや、暗くして深き赤松の並木と林、樹神を祀れる多くの古杉、楊柳と赤楊との群落、大なる藁屋根檜の垣根、その配合余りに暗くして錯綜せり。」と書いた郷里の複雑・錯綜と同一の「錯雑さ」を読みうるのではないか。景象の複雑、生活と絡み合った植生の錯綜ばかりでなく、人間とは異類の伝承的存在との共存にも錯雑さをも含めて、それらを「容易に把握をゆるさない」風景としてまとめているのではないかと、私は考える。

3

下書稿㈠の最終形態をきれいに清書した下書稿㈡は、その後の手入れによって、次のような最終形態になる。これが、全集等に「九九　〔鉄道線路と国道が〕」として掲載されているものである。

九九

〔鉄道線路と国道が〕

一九二四、五、一六、

鉄道線路と国道が、
こゝらあたりは並行で、
並木の松は、
そろってみちに影を置き
電信ばしらはもう堀りおこした田のなかに
でこぼこ影をなげますと
いたゞきに花をならべて植えつけた
ちいさな萱ぶきのうまやでは
馬がもりもりかいばを噛み
頬の赤いはだしの子どもは
その入口に稲草の縄を三本つけて
引っぱったりうたったりして遊んでゐます
柳は萌えて青ぞらに立ち
田を犁く馬はあちこちせわしく行きかへり
山は草火のけむりといっしょに
青く南へながれるやう
雲はしづかにひかって砕け

水はころころ鳴ってゐます
さっきのかゞやかな松の梢の間には
一本の高い火の見はしごがあって
その片っ方の端が折れたので
赭髪の小さな goblin が[注14]
そこに座ってやすんでゐます
やすんでこゝらをながめてゐます
ずうっと遠くの崩れる風のあたりでは
草の実を啄むやさしい鳥が
かすかにごろごろ鳴いてゐます
このとき銀いろのけむりを吐き
こゝらの空気を楔のやうに割きながら
急行列車が出て来ます
ずゐぶん早く走るのですが
車がみんなまはってゐるのは見えますので
さっきの頬の赤いはだしの子どもは
稲草の縄をうしろでにもって
汽車の足だけ見て居ます
その行きすぎた黒い汽車を

この国にむかしから棲んでゐる
三本鍬をかついだ巨きな人が
にがにが笑ってじっとながめ
それからびっこをひきながら
線路をこっちへよこぎって
いきなりぽっかりなくなりますと
あとはまた水がころころ鳴って
馬がもりもり噛むのです

冒頭部は第一形態では下書稿㈠の最終形態を引き継いで、「これは所謂芬芳五月／陸中国の清明である」と僧の行脚する時間（五月・清明）と場所（陸中国）を指示するものであった。前近代を意識させられる場所と季節の呼称を用いていたが、推敲過程で、この二行を「栗駒（オコマ）山の雪が小さく古び」とした後、「鉄道線路と国道が、こゝらあたりは並行で、／電信ばしらはもう掘りおこした田のなかに／でこぼこ影をなげますと」とした。「鉄道線路」「国道」「電信ばしら」はいずれも明治以降この土地にもたらされたものであり、場所を指示する題材としてこれらを冒頭部においたのである。

これに対応して、末尾部では、「これは所謂清明五月／あしたは移る陸中国の風景である」と冒頭部の「清明」「陸中国」を反復していた詩行を削除して、まず次のような詩句を追加した。

このとき銀いろのけむりを吐き
こゝらの空気を楔のやうに割きながら
急行列車が出て来ます

ずゐぶん早く走るのですが
車がみんなまはってゐるのは見えますので
さっきの頬の赤いはだしの子どもは
稲草の縄をうしろでにもって
汽車の足だけ見て居ます

冒頭部に登場した鉄道線路を、急行列車が驀進してくる。それを小さな萱ぶきのうまやの前で遊んでいたはだしの子どもが、驚きと興味に満ちて見入っている。この手入れは、近代以降の事物の付加という意味で、冒頭部と同一の性格のものである。

冒頭部および末尾部の詩句中の、鉄道線路と並木のある国道が並行し、さらに栗駒山が遠望される地点は、一九二四年当時の花巻農学校の実習地の近辺には見あたらず、花巻近郊の二枚橋から石鳥谷のあたりに相当する。そこに一九二四年五月一六日（金）に、「銀いろのけむりを吐き／こゝらの空気を楔のやうに割きながら／急行列車が出て」くるのは、午前一〇時前後の東北本線下り一列車しかない。[注15] この日賢治は二時間の授業と実習を担当しているし、[注16] また特別な学校行事もなかったようだ。それゆえこの日の、日中にそのあたりを訪れるのは不可能である。実習後ならば可能であるが、この心象スケッチに描かれている時刻は、夕刻ではないし、先の急行列車の時間にはまったく間に合わない。とすれば、この追加挿入は、一九二四年五月一六日に宮沢賢治が、鉄道線路と並木のある国道が並行した地点での手帳等のメモ・スケッチをもとにして行ったものや、その時の記憶にさかのぼって行ったものではなく、このスケッチの推敲の方向に沿うような情景を選んで組み込んだものということになろう。

このスケッチの始めには、詩人は、目の前に展開する時間や風景を、近代以前を表象する呼称で名指していた。一九二四年五月の現実に重層する歴史性を現前させる詩句が、下書稿㈠から下書稿㈡の第一形態にかけて選び取られていたので

ある。しかし、ここでは、詩人はそれらを削除し、明治以降の進展する時間、すなわち近代化を象徴する事物をおいたのである。

この削除挿入に続いて、さらに巨人が登場する場面が付加されている。

その行きすぎた黒い汽車を
この国にむかしから棲んでゐる
三本鍬をかついだ巨きな人が
にがにが笑ってじっとながめ
それからびっこをひきながら
線路をこっちへよこぎって
いきなりぽっかりなくなりますと

ここに現れる巨きな人は、三本鍬を持っているから何かしら農事に関係するのだろうが、私は現在のところ民譚や民話・昔話、伝承などにこのような存在は発見できていない。賢治の創作かもしれない。いずれにせよ、「この国に昔から棲んでいる」存在であって、この土地の人々とともに生きてきたものとして登場している。

この「巨きな人」は、子どもが驚異をもって眺めていた汽車を、「にがにが笑ってじっとながめ」ている。この巨人の笑いは、数ある賢治的〈笑い〉のなかでも、不思議なものである。この笑いからは、巨人のどんな心情を想像すればよいのだろうか。「にがにが笑う」笑いは、童話「サガレンと八月」や「みぢかい木ぺん」、心象スケッチ「〔このひどい雨のなかで〕」（「春と修羅」第三集補遺所収）のなかにも現れる。[注17] これらのなかでは「にがにが」笑う笑いは、満足や喜びが外に現れた表情を示しているし、また自分に自信をもった笑いを表している。そしてこれらはいずれもかげりのない笑いで、皮肉や悲しみ、苦しみ、嘲り、冷笑などとは無縁の笑いである。

この巨きな人の「にがにが笑い」もこれらのテクストにおけるそれと大きく異なることはない。たとえば、巨人は、自分が存在する民俗的世界に進入してきた近代＝汽車を、にがにが（苦々）しく見て笑っている（苦笑い）という解釈も成り立ちそうである。汽車と巨人を対立するものととらえ、巨人が汽車に侵略されるという構図を読むわけだ。確かに、先の佐々木喜善が語るように民俗的記憶が近代化によって衰滅しつつある現状は存在したのだから、それらを対立的に把握することは可能であろう。このテクストが書かれた時代に即して解釈すれば可能でも、このテクストの内部ではそのようにはなっていないのではないか。ここで、巨人は、「笑って」汽車の後ろを、「じっと」眺めている。そしてその後には話者に近づいて「ぽっかりなくなる」。この消え方から、巨人は空に浮かぶ雲を見立てたものかとも思えるが、それはともかく、巨人は過ぎ去った汽車に対しても敵意のような感情を抱いているのではなく、むしろ親和的ではないだろうか。とすれば、ここで巨人の「にがにが」笑いは、はだしの子どもと同じように、汽車の驀進そのものに対する素朴な、幼児的な喜びがもたらしたものととらえられるだろう。

この手入れによって付加されたのは、近代的なるものと、伝承世界及び伝承世界を保持する人々との共存を描く詩句であったということになろう。

これが付加され、冒頭部が近代以降の現代の風景に手入れされることによって、詩のなかでのゴブリンの意味も変わっていった。下書稿㈠で、彼が眺めていたのは「陸中の五月」の風景であった。陸中という歴史性のなかにゴブリンもあったのだが、この手入れにより、ゴブリンのいる場所も眺める場所も、一九二四年の岩手県になる。そして、そこにゴブリンも共存しているということになった。民俗伝承的な「三本鍬を持った巨きな人」と童話的存在のゴブリンは、ともに一九二四年の岩手の急行列車が驀進する鉄道線路と国道の並行するあたりの場所に出現することになったのである。

「九九　行脚僧の五月」は、以上のような推敲課程を経て、「九九〔鉄道線路と国道が〕」に変貌した。行脚僧の目にうつる、前近代性を保持した浮世絵を見るごとき陸中国の五月の風景。そこでは、様々な樹木が生活の場を装景し、春の自

然が生き生きと息づき、妖精のようなもの（ゴブリン）が憩っている。このような風景が、行脚僧の目からスケッチされていたのである。「九九　〔鉄道線路と国道が〕」では、行脚僧という視点人物は消去される。全体の風景は変わらないが、近代化されつつある今・現在という時間を明示する場所を描きだす。ゴブリンに、伝承的巨きな人の存在を追加し、これら童話的・伝承的存在と近代化される風土の親和的・調和的様相が心象スケッチとして定着されたのである。

このスケッチで描かれる岩手の五月は、「注文の多い料理店」広告ちらしの

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスガ迚つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもつて実在した／ドリームランドとしての日本岩手県である。

を参照するならば、まさに「ドリームランドとしての日本岩手県」＝イーハトヴの五月のスケッチに他ならないということになるだろう。

このスケッチの書かれた用紙（赤罫詩稿用紙）の右側欄外に、手入れに用いた筆記具（鉛筆）で、手入れと同じ時に、「童話の扉［に→へ］」という書き込みがなされていた。

これは、賢治が「九九　〔鉄道線路と国道が〕」を、刊行予定の童話集の扉に掲載する意図を持っていたことを示すものである。このメモが、下書稿㈠「陸中の五月」や下書稿㈡第一形態「行脚僧の五月」に付されたものではなく、それらの発展形とも言うべき「〔鉄道線路と国道が〕」に記されたのは、このようなスケッチの性格が、刊行されるべきイーハトーブ童話集の序としてふさわしかったからであろう。その童話集とはいったいどのようなものか。賢治の童話集類集メモの中から、「〔鉄道線路と国道が〕」に響きあうような内容の童話集構想を探せば、「村童スケッチ」「イーハトーブ民譚集」がそれに相当すると考えられる。しかし、「童話集の扉へ」メモ記入の時期と「村童スケッチ」「イーハトーブ民譚集」メモの時期[注18]について明確な時期の特定ができないので、これは想像の域を出ない。

注1　下書稿㈠・㈡のいずれも赤罫詩稿用紙に書かれている。下㈠一枚、下㈡一枚である。筆記用具は手入れ・メモを含みすべて鉛筆。
注2　原文は「gobblin」。校訂して示した。
注3　原文はふりがななし。
注4　「九三〔日脚がぼうとひろがれば〕一九二四、五、八、」の下書稿㈠。
注5　「〈イーハトヴ〉への志向」『宮沢賢治　明滅する春と修羅』（蒼丘書林、平5・1）所収。
注6　「共業所感」は仏教語である。「共業」（グウゴウ）とは、たとえば『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、昭11・11）には、「共通の業の意。即ち自他共用の器世間の果を感ずる衆生共通の業因を云ふ」と説明されているが、賢治のこの語に対する理解を含めて論者には未詳である。
注7　最終形態では、題名が「清明どきの駅長」になる。
注8　今井柏浦編、修省堂、昭6・5
注9　「東北文化研究」2巻3号（昭4・9）所収
注10　平野敬一他訳、冨山房、平4・9
注11　「ワルトラワラ」15号（平13・11）所収
注12　「天邪鬼」五の巻（昭3・7）所収
注13　「批評へ・2号―評論研200回記念」（平4・2）所収
注14　注2に同じ。
注15　一九二四年五月の時刻表に拠れば、東北本線下り急行八〇一列車（上野発青森行き）が、一ノ関を午前八時二五分に発車して盛岡に午前一〇時一九分に到着する。ここから、石鳥谷あたりの通過を午前一〇時前後と推定した。
注16　「〔花巻農学校授業時間割〕」（新校本全集第14巻本文編及び第16巻(下)年譜篇271頁所収）、花巻農学校「受持学科および分掌」（第16巻(下)補遺・伝記資篇所収）及び「大正十三年度岩手県立花巻農学校学校行事」（第16巻(下)補遺・伝記資篇所収）に拠る。
注17　・「こんならもう穴石はいくらでもある。それよりあのおっ母の云ったおかしなものを見てやらう。」タネリはにがにが笑ひながらはだしでそのぬれた砂をふんで行きました。すると、ちゃんとあったのです。（「サガレンと八月」・傍線杉浦、以下同）
・鉛筆はまだキッコが手もうごかさないうちにじつに早くじつに立派にそれを書いてしまふのでした。キッコはもう大悦びでそれをにがにがならべて見てゐましたがふと算術帳と理科帳を取りちがへて書いたのに気がつきました。（「みぢかい木ペン」）

・ああいふふうに若くて／頬もあかるく／髪もちゞれて黒いとなれば／べっかうゴムの長靴もはき／オリーヴいろの縮みのシャツも買って着る／そしてにがにがわらってゐる／かぐらのめんのやうなところがある（「〔このひどい雨のなかで〕」）

注18　小沢俊郎は「宮沢賢治童話類集メモ考」（『小沢俊郎　宮沢賢治論集』第1巻、有精堂、昭62・3所収）で、この二種のメモの執筆時期を昭和五年と推定している。ちなみに表紙に、「村童スケッチ」と書かれている童話は「谷」「十月の末」の二篇、「イーハトーブ民譚集」は「二人の役人」一篇のみである。

付記　本稿は、「国文学」2月臨時増刊号（平15・2）所収「賢治詩のなかに〈童話〉を読む」中の「九九〔鉄道線路と国道が〕」を大幅に増補加筆したものである。